私が一般の作詞コンテストに入賞したり、本を出版しても必ず〝障害者の松兼功さんの〟とか〝障害をもったフリーライター〟といった見出しがついてまわる。確かに障害は私の一部であり、「障害者」は私を表わす代名詞の一つでもある。それを啓蒙や社会への働きかけの手段として使うこともあるし、必要に応じて、使われることもやぶさかではない。

とはいえ、「障害者」は私のすべてではないのだ。年がら年中、そんな枕ことばを押しつけられていたら感性や人生が息切れして、毎日を楽しめない。のびのびとした福祉社会には、諸々の重荷から開放され、ただの人間としてふるまえる空間や時間が不可欠のはずだ。

先日、日本のある福祉関係者がスウェーデンに視察旅行に出かけた。そのA氏は以前から障害者の芸術文化に関心を持っていて、視察でもそこに焦点を当てたいと考えていた。現地の福祉のエキスパートからどんな場所（ひと）を訪問したいかと尋ねられた時も、とっさに日本人の通訳を通して、

「〝障害者の画家〟に逢いたいんですが……」

と答えた。ところが、その意味がエキスパートにはなかなか伝わらなかった。長年、スウェーデンで生活している日本人通訳がA氏の言葉を繰り返し言い直したが、通訳の不愉快そうな目はエキスパートにではなく、A氏に向けられていたらしい。やっとのことで、A氏の真意を読み取ったエキスパートは少し口調をきつくしてこう答えたそうだ。

「スウェーデンには、画家のなかに障害を持った人はいますが、〝障害者の画家〟はいません」

この問答に、残念ながら日本とスウェーデンの福祉のレベルの差が如実に出ている。日本には障害をもつ人たちに〝障害者〟という冠をつけ、一様に特別視（扱い）する風潮が根づいてしまっている。一方、スウェーデンでは障害を持っていても、その人の生身の人間としての個性、感情、能力を最大限に尊重していくことに国民のコンセンサスが出来上がっている。だから、みんな〝障害者〟の三文字を意識せずに対等な立場で生活していけるのだろう。

枕ことばを超える人間関係をどうつくっていくか？　私たちのこれからの羅針盤はそこにある。